

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishii

第三章「煩惱具足のわれら」

自力無効の身

大乘の仏道の仏道たる所以は、「断惑証理」にある。自分の力（自力作善）で苦悩と迷いの因である「我痴・我見・我慢・我愛」の心（自他差別心）を消滅し、そこから生じる「煩惱」を断ち切ってこそ、自他共に、生死の迷いを越えて、無上涅槃の真理を証しすることができる道である。宗祖にとって、「大乘仏教」を標榜する比叡山での修行の目的もそのこと一つに尽きたのであろう。しかし、20年に及ぶ修行の末、明らかになったことは「煩惱具足」の身、「いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざる」身の事実であった。「永遠に救われざる身」の自覚は、宗祖にとって、どれほどの絶望と煩悶に身を焦がしたことであったことか。

「ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出づべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いし」（『恵信尼消息』）、師法然との出遇い、本願との値遇は、宗祖のみならず、吉水教団に集うた人々、そして、流罪以後、出会われた「いなかのひとびと」、その多くは、当時の社会体制から支配され、

搾取され、差別され続けられた人々であった。それどころか仏教教団からも「女人」「破戒・無戒の悪人」と「断惑証理」の仏道とは無縁なものと疎外され、排除された人々にどれほど大きな歓喜を喚び起こしたことであろう。「われら」とは、その人々の中に、「本願の機」として自己を発見した感動の言葉に他ならない。

函蓋相称

中国に出られた曇鸞は「相応とは、譬えば、函と蓋と相い称えるが如し（『浄土論註』）と、本願との相応の事実を語られた。「はこ」と「ふた」がピッタリ一つに重なり合うとは、「はこ」が「ふた」になるのでも、「ふた」が「はこ」になるのでもない。「はこ」が「はこ」の事実に戻るところに、「ふた」が「ふた」になるのである。凡夫悪人が善人になって、助かるのではない。いつでも、善人ぶっていたい私、それは、限りなく夢を見ている自己である。これが「闇」である。徹底して、わが身の事実である凡夫悪人の大地に戻る。そこに「本願」が「本願」として用く。これを「相応」といい、その具体的事実を、「他力をたのむ」というのであろう。

「阿闍世」の為に

宗祖は『信巻』の結びに『涅槃経』を引用し、難治の機たる阿闍世の回心が語られる。

父王を殺害し、母を牢に幽閉した阿闍世は後悔の余り、熱を出し、体中にできた瘡によって苦しむ。耆婆の「慙愧あり」のことばによって、釈尊のもとへ向かう。今まさに「涅槃」に入ろうとするところであった釈尊は語られた。「阿闍世王の為に、涅槃に入らず」、「阿闍世は普くおよび一切、五逆を造る者なり。煩惱等を具足せる者なり」と。

宗祖は、自身の上に「阿闍世」の存在を見られた。そこに大悲する本願に出会われたのであろう。宗祖が90才まで生きられたのは、750年後の「阿闍世」の為に、涅槃に入るのを止めて下さったのに違いない。